

岸田文雄首相の就任当初の「メモノート」、「所得倍増」、「異次元の少子化対策」はどうなった。ポーズばかりで国民の声を聴く力、洞察力、文章力、想像力も無く、まるで鈍感、失望ばかり!



これ以上、海を汚しては
なりませぬ!

朝倉悠三さん「震災絵日記」。
(2013年8月25日『福島民報』)

反対を無視“汚染水の海洋投棄”

■8月24日午後、国と東電は事故の福島第一原発からの「汚染水の海洋投棄」を開始。多くの問題点を考えると…

- ①15年の約束「関係者の理解なしには処分しない」を破った。
 - ②トリチウムだけを話題にしているが、他の放射性物質のストロンチウム90、ヨウ素129、セシウム137、プルトニウム239などはどうなっているのでしょうか。
 - ③国内の「原発事故」問題を、「海洋投棄」は国際的環境の大きな問題に発展させてしまった。
 - ④初めから一番安易な「海洋投棄」だけで進行し、他の処分法、スリーマイルで実施した蒸発法、モルタル固形化、あるいは大型タンクを増やしての保存などを検討する努力をしていない。
- 《「モルタル固形化」「大型タンク保管」の詳細は裏面に掲載しました⇒》
- ⑤日本は「直接デブリに触れた核汚染水」で、他国の場合は「冷却水の間接的汚染水」です。
 - ⑥多くのメディアは国と東電の発表を伝えているだけで、批判精神を失っている。「安全神話」を流し続けた原発事故前と同じ状況だ。福島県や知事の対応もまるで他人事のようだ。
 - ⑦デブリ880トンを取り出せるのか。地下水流入を止める根本的対策もとらずに、廃炉までの30年以上「海洋投棄」を続けて、長期の放射能の影響や食物連鎖で人間への悪影響はないのか。
 - ⑧風評被害の補償を漁業者だけでなく他の被害業者にも行う、そんな膨大な補償ができるのか。
 - ⑨中国や韓国など海外からの批判を予想できなかった政府、虎の尾を踏んでしまったのではないのか。

大月規義記者は、昨年から朝日新聞社南相馬支局長・編集委員(震災復興・原子力政策担当)。これは、2023年5月27日の『朝日新聞』全国版記事(一部略)ですが、福島の被災民の思いを代弁する内容です。



編集委員

おおつき のりよし
大月 規義

処理水放出

続く「その場しのぎ」回るツケ

東京電力福島第一原発から出る汚染水を、「安全」に処理して海に流すことへの漁業者らの反発。その原因をたどると、東電や国が「その場しのぎ」を続けてきた歴史が垣間見える。

汚染水の大量とは、原子炉の建屋へしみ込む地下水や雨水だ。そもそも大量の地下水の噴出は、第一原発の建設が始まった1960

年代から問題になっていた。原発を安定した岩盤の上に建て、海上から築に資材を運搬するため、地面を20センチ以上掘り下げたことが原因と言われる。地下水の発生と排水は、運転を開始した後も続いた。

そんな国と東電が、建屋に入る前の地下水を海に流すために漁業者の説得に使ったのが、処理水は「関係者の理解なしには処分しない」という15年の約束だ。実際は、タンクが敷地に満杯になるまでには「理解」が進むだろうという樂觀に過ぎなかった。(略)

当座をしのご対応は、他にもある。福島県内の除染で出た汚染土を、国は原発近くの双葉、大熊両町の中間貯蔵施設にためている。当初は最終処分場にするはずだったが、「中間貯蔵」と言い換え、「30年後に県外に運び出す」と約束し2町を説得した。その後、除染土の県外搬出は法律に明記されたが、見直しは全く立っていない。

国は各地で原発の再稼働や新増設を進めようとしている。だが、増え続ける高レベル放射性廃棄物の処理など、深刻な問題から目をそらし続けた。そのツケが必ずどこかに回ってくることは、福島の現実が示している。

実績ある代替策の真剣な検討を

原子力市民委員会座長、龍谷大教授 大島堅一さん



今からでも海洋放出中止を!

おおしま・けんいち=博士(経済学)。立命館大学教授などを経て現職。原発事故後、経産省総合資源エネルギー調査会基本問題委員など歴任。著書『原発のコスト』など

その① モルタル固化

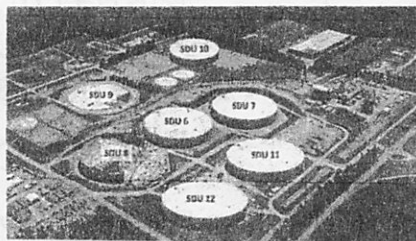
環境への影響が最少/米国で使用

海洋放出以外にも方策があります。

原発技術者らも参加する原子力市民委員会は、より安全な代替策としてモルタル固化と大型タンク保管を提案しています。

モルタル固化は汚染水をセメントと砂でモルタル(セメントに砂と砂利を混ぜるコンクリートとは違う)にして、永久的に固めてしまう方法です。海などへの流出リスクがなく、環境への

影響が一番少ない案です。コンクリート製タンクをつくり、モルタル化した汚染水を流し込んで固めます。米国などで実績がある方法です。



モルタル固化の実績例。汚染水をモルタル化して最大約15万立方メートルの円形半地下コンクリート製タンクに流し込み、固化しています。ミサウスカロライナ州のサバンナリバー核施設(同施設のホームページから)

アメリカで成功している
コンクリート固形化法

その② 大型タンク保管

石油備蓄などで堅固さにも信頼性十分

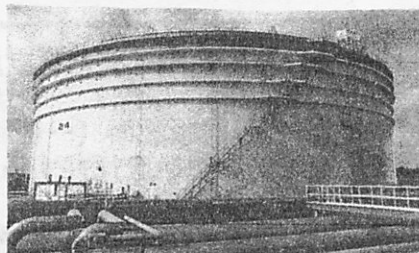
大型タンク保管は石油備蓄などに使われてきた実績があり、堅固さにも十分な信頼性があります。

これらの代替案は、これまで公の場で提案者が参加する形で、きちんと議論されたことはありません。

それは、安価な海洋放出という結論が先にあったからです。

当初、政府は海洋放出の費用を、ほかの処分方法の10分の1以下の34億円と見込んでいました。ところが、実際には放出のための海底トンネルの建設に430億円、また国費から風評対策

や漁業者支援に800億円が計上され、現時点でも1200億円を超えています。今後、どれだけ経費が膨らむか分かりません。



現在の汚染水タンクの100倍の容量がある10万トンの大型タンクの実績例=青森県六ヶ所村の「むつ小川原油備蓄株式会社」(同社ホームページから)

なぜ海洋放出の
代替策を
検討しないのか

はらまち九条の会事務局

○会長:平田慶肇 TEL(0244) 24-1211

○事務局長:早坂吉彦 TEL090-2975-2508

○事務局次長:山崎健一(福島市) TEL090-7527-5453 Eメール:yamazakiken1@gmail.com

○会計:井上由美 〒975-0031南相馬市原町区錦町1-43井上薬局内 TEL22-7511・FAX26-0892

○石田賢二(郡山市) TEL080-5556-4037 ○番場恵子 TEL22-0715 ○大浦祥見 TEL24-0704

○志賀勝明(相馬市) TEL090-9530-5524 ○若松麟二 TEL090-4929-7227 ○田中徳雲(小高区)

夕空はれて あきかせいき
つきかけ落ちて 鈴虫なく
おもえば遠し 故郷のそら
ああ父母 いかにおゆす(「故郷の空」)

